名桜大学総合研究，(28)：157-161（2019）

調査・実践報告

新聞報道にみるUSCAR看護顧問　ワニタ・ワーターワース

安和やよい*，名城　一枝**

A Nursing Advisor of USCAR in Newspaper Coverage: Juanita Watterworth

Yayoi AWA*，Kazue NASHIRO**

要　旨

ワニタ・ワーターワース（Juanita Watterworth）は1950年から1960年の10年間，米国占領下の沖縄で琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands: 以下USCAR）の看護顧問として，沖縄の看護や看護教育に影響を与えた。ワーターワースの残した功績は，琉球政府の医療行政や看護教育に携わった沖縄側の看護関係者の回想録などに多く記録されている。しかしUSCARの看護行政に携わった看護顧問17名の中で，最長滞在期間である10年にわたって沖縄に留まり，沖縄の看護に貢献したとされるワーターワース自身のものとされる発言の記録は少ない。そこで沖縄タイムス紙に掲載されているワーターワースの記事を，USCAR文書，占領下の看護をテーマとした研究，占領下にワーターワースとともに看護教育や行政に携わっていた琉球政府関係者・看護婦らの回想録とともにワーターワースの当時の沖縄の看護や看護教育についての考え等の記述がないか検討した。

キーワード：USCAR，ワニタ・ワーターワース，直接占領下，沖縄

Abstract

Juanita Watterworth had served as a nursing advisor of the United States Civil Administration of the Ryukyu Islands（USCAR）for 10 years from 1950 to 1960, and gave much impacts on Okinawan nursing and nursing education under the occupational period. The achievements that Watterworth left behind are recorded a lot in reminiscences of nursing officials who had engaged in medical administration and nursing education of the Ryukyu Government. Among the 17 nursing advisers who had engaged in nursing administration of USCAR, Watterworth had the longest stay period of 10 years and contributed to nursing in Okinawa. There are few records of remarks that are supposed to be owned by Watterworth herself, however. This paper is to find descriptions what Watterworth said regarding nursing and nursing education of Okinawa under the occupational period within the newspaper articles. In order to define her descriptions, the obtained articles are compared to the USCAR documents, research papers on the theme of occupied nursing, and reminiscences written by nurses who engaged nursing and nursing education with Watterworth.

Keywords: USCAR, Juanita Watterworth, under Direct occupation, Okinawa

* 名桜大学総合研究所　〒905-8585　沖縄県名護市為又1220-1　Meio University Research Institute 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa, 905-8585, Japan
** 名桜大学人間健康学部看護学科　〒905-8585　沖縄県名護市為又1220-1　Department of Nursing, Faculty of Human Health Science, Meio University 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa, 905-8585, Japan

Ⅰ．はじめに

ワニタ・ワーターワース（Juanita Watterworth）は1950年から1960年の10年間，米国占領下の沖縄で琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands: 以下USCAR）の看護顧問[1]として，沖縄の看護や看護教育に影響を与えた。

ワーターワースの残した功績は，琉球政府の医療行政や看護教育に携わった沖縄側の看護関係者の回想録などに多く記録されている[2－3]。しかしUSCARの看護行政に携わった看護顧問17名の中で，最長滞在期間である10年にわたって沖縄に留まり，沖縄の看護に貢献したワーターワース自身のものとされる発言の記録は少ない。

Ⅱ．目的・方法

沖縄タイムス社デジタルアーカイブで1945年から2015年までに発行された新聞記事を対象にワーターワースの名前をキーワードとして検索し，得られた記事をUSCAR文書，占領下の看護をテーマとした研究，占領下にワーターワースと看護教育や行政に携わっていた琉球政府関係者・看護婦らの回想録に照らし合わせ，ワーターワースの当時の沖縄の看護や看護教育についての考え等の記述がないか調査した。

なお，Juanita Watterworthの日本語表記が複数あるため[4]，ワニタ・ワーターワース，ジャネッタ・ワーターワース，ジャンター・ワーターワース，ワーターワーズ，の名前で検索した。

倫理的配慮：本稿には沖縄タイムス社発行の新聞記事と沖縄公文書館及びミシガン州立大学歴史文書館で一般に公開されている文書を検討資料として使用している。また本稿の目的に関係のない資料中の個人名・地名などは本文で使用していない。

Ⅲ．結果

1．先行文献で使用されているワーターワースの日本語表記，ワニタ・ワーターワース，ジャネッタ・ワーターワース，ジャンター・ワーターワース，ワーターワーズのワードで検索した結果，1945年から2015年までの期間で25件の記事が確認できた。うち８件はワーターワースが帰国後に記事となったものであった。

2．ワーターワースの名前が確認できる最初の記事は1957年６月22日に発行されたもので，ワーターワースが帰国するまでに発行された記事の多くは，彼女がUSCARでの職務以外に行った寄付やボランティア活動についてであった。７件の中に，沖縄の少年がハワイで治療を受けることについての記事があり，ワーターワースが米看護婦クラブ会長の立場で，沖縄の少年を米国で治療できるよう支援したのは，米看護婦クラブの初めての試みでもあると話したと記載されている[5]。

3．寄付・ボランティア活動関連記事の他にはワーターワースの表彰[6－8]，琉球政府立看護学校の戴帽式への出席[9－10]や離島の医療施設の視察[11－12]など，USCAR職員としての動向を伝える短い記事などが含まれていた。

4．ワーターワースが帰国する２年前の1958年（昭和33年）５月５日の記事には彼女のインタビュー記事が掲載されている。記事ではワーターワースの看護顧問としての仕事が琉球政府社会局医政課と関連していること，看護学校設立運営など，それまでの業績，夫が沖縄近海の戦場で戦死したことなどの他，一緒に働く沖縄の人々を「最初に教えたレディたち」と表現し，自身の業績について「最初に教えたレディたちが今では仕事を分担し引き受けてくれるからです。立派なレディたちと一緒に仕事をしているので私もきれいな心で仕事せざるを得ないのです。」と話している[13]。

5．沖縄在任中のワーターワースの最後の記事は1960年５月17日，ワーターワースが本国転勤となること，転勤に伴い沖縄側の看護関係者によって送別会が開催されることを知らせるものであった[14]。

6．ワーターワースが帰国した1960年以降は，看護関係の協会設立記念やUSCAR看護顧問追悼式の記事に彼女の名前を確認することが出来る[15－16]。

7．1980年代に入ると，琉球政府関係者が記述した「私の戦争史」のシリーズや回想録などにUSCAR看護顧問としてワーターワースの名前が記載されている[17－18]。

Ⅳ．考察

米国による占領政策は終戦から復帰までの27年間継続した[19]。大嶺は27年間の占領期の沖縄の看護教育を創設期，確立期，充実期，本土化の４つの期間に分けている。1945年から1951年までを創設期とし，この期間に沖縄本島に３校の看護学校が設置されている。「看護婦養成学校法（布令第35号）」及び「看護婦資格審査委員会（布令第36号）」が公布された1951年から「看護婦並びに看護婦免許に関する布令（布令162号）」が公布される1956年までを確立期とし，1956年から1968年までを充実期，公衆衛生看護婦助産婦看護婦法が公布された1968年から1972年の日本復帰までを本土化としている[20]。

ワーターワースが沖縄に着任したのが1950年１月[21]，離任が1960年６月[22] であるから，創設期から充実期に公布された布令のほとんどに関わっていた事になる。しかし占領側の看護顧問として沖縄の看護や看護教育に関わっていたワーターワースの発言のほとんどが，短い文章や断片的な言葉としてしか残っていない。当時の沖縄側の看護関係者と看護顧問とのコミニケーションが通訳を介して行われていた事，また通訳担当者も「衛生教育講座の通訳」のために「アメリカと日本の本を繰り返し読んで…通訳の任務を重ねた」[23] とあることから，英語・日本語の言葉の壁に加え，医療の専門用語を使わなければならないということなどが，短い文書や断片的な言葉となったのではないかと想像する。

ワーターワースの言葉として残っているものに短い文章が多い中で，コザ看護学校の初代教務課長だった蘇我の回想録にあるワーターワースの発言は，ワーターワースが看護教育についてどのように考えていたかを知るうえで興味深い。ワーターワースは教務課長であった蘇我に，アメリカの看護教育が大学に昇格した時期のことを，次の様に語っている。

「当初，自分等は看護教育の大学昇格を目指す必要性，基準の向上により社会的な影響，民衆に及ぼす幸福についての理解を多くの人に求めて運動をした開始した。

まず，行政面の人々，学識の高い層の人々，種々の婦人団体への働きかけ，最も強力な協力者になるであろう患者さんへの働きかけ等々，それは長い期間うまずたゆまず続けられ，社会的にある種のムードを作り上げるのに成功した。しかし大学の塀はあまりにも高く，あまりにも厚く，私等が必死にたたいても，なかなかドアを開けてはくれなかった。大学の高い塀の下までたどり着いて，個々でくじけては今までの苦労が無になると，皆で考えた。

私等は一人でもいいから，この塀の中に押し入れようと決心し，皆で押し上げた。その一人は必至になって高い塀に飛びつき，ようやく爪をかけることができたが自分の体の重みで爪から血をにじませ，あえいだ。支えている皆も大層な努力をし，しかし爪ははずさぬよう懸命に励ました。」

・・・「確かに単科大学をめざすのは難しい。準備に手間と時間がかかりすぎる。しかし，既成の大学に学部を新設するのは，それほど難しいことではない。努力の仕方によっては，実現可能と思われる。唯々自分がここで最も気になるのは専門課程の教授陣の事なのだ。皆が熱意と努力を持ってもしても，これからかなり遠い道のりになるだろう。」と[24]。

ワーターワースをはじめ，USCAR看護顧問らは沖縄の看護教育のための人材育成を熱心に進めていた。1954年に開始された琉球政府立看護学校の琉球大学委託制度も人材育成を目的とし，USCAR看護顧問たちの指導力によって実現したとある[25]。

蘇我の回想録に，ワーターワースが看護の大学教育化について語った正確な日時は記されていないが，「近く那覇に病院と看護学校が新設される予定」とあることから，琉球政府立那覇看護学校が設置される1959年４月[26]以前の出来事であったと考える。「近く」がどれくらいの期間を指しているのか不明だが，1958年５月のインタビューが先であるとするなら，「最初に教えたレディたち」は今ではワーターワースの仕事を分担できる程になっているが，大学教育には，専門科目の教授の確保など大学教育実現はまだ先のことだと予測していた発言である。

沖縄での大学での看護教育の開始は1968年[27]，単科大学での看護教育ではなく，開学から18年経過していた琉球大学に保健学部を設置するという，ワーターワースが考えていた方法で開始されている。琉球大学の保健学部設置に関与したミシガン州立大学教授団のジャック・ストックトンは琉球政府立看護学校を琉球大学に移管し看護学校での教育方法を継続することが望ましいとしていた[28−30]。琉球政府側の看護関係者も看護学校の移管に賛成していたが[31]，看護学校移管は実現せず看護学校の教育は日本復帰後も継続した。

1958年５月５日のインタビュー記事でワーターワースが琉球政府側のスタッフを「最初に教えたレディたち」と表現していることから，ワーターワースが沖縄側のスタッフに対して，特別な感情を持っていたのではないかと思われる。USCAR看護顧問であるワーターワースから見れば，琉球政府側の人間は同僚ではないからcolleagueやassociate，coworkerなどの言葉は当てはまらない。また同じような職務を担っているが，違う組織に属している者を指すcounterpartは，相手の専門性が同等でなければならない意味合いがあるため，「教えて」「分担できるくらい」の相手に対して使うには，適当ではない。「レディたち」を「人々 people」に置き換えたとしても，ワーターワースが考えていることを充分に伝えることが出来るのではないだろうか？　あえて「レディたち」と表現した点に，ワーターワースがどのような姿勢で沖縄側の人々と接していたかが伺える。

戦後GHQの公衆衛生福祉局長として日本の医療改革を行ったサムス准将は，占領開始して間もなく文部省・厚生省を訪問したことを「表敬訪問」とニッポン・タイムスに報じられ，これを「支配者と被支配者の関係がデ

リケートな状況」で『「支配者と被支配者の間の一線」を踏み越えてしまった』「失敗」と回想している。またサムスは日本人の尊敬と協力を得るために，微妙な一線を確保することが必要であったとも述べている[32]。ワーターワースの琉球政府の看護関係者を表す時の言葉の選び方や，寄付やボランティア活動に積極的に参加する態度は，はサムスの考えとは異なる印象を受ける。

新聞報道の経験から慎重に行動するようになったとサムスが語っているように，占領軍は新聞をはじめとするマスメディアを反占領軍活動に利用されないようコントロールしていた[33]。ワーターワースの寄付やボランティアの記事が新聞に掲載されるようになったのは，ワーターワースが沖縄に着任して７年経過した1957年以降で，その前年から軍用地をめぐる大規模な闘争（島ぐるみ闘争）が始まっている。1959年に開催された沖縄祖国復帰促進県民大会は1958年に結成された沖縄原水協が主催したものであった。1959年には宮森小学校に米軍のジェット機が墜落する事故がおこり，反占領活動が活発になっている[34]。このような時期にワーターワースの寄付やボランティアの記事が多く掲載されていることとの関係は不明だが，ワーターワースが治療の必要な少年への援助や，寄付を募って医療施設の整備をしていたことは，琉球政府の看護関係者の回想でも確認できる[35]。

新聞報道でワーターワースを形容する言葉には，沖縄の看護の母[36] の他，強情[37]，高圧的[37]，口うるさい人[38]，公看の元締め[39] など，厳しい印象を受ける言葉も少なくない。占領下の看護指導者が仕事に対して厳しい態度をとっていたとされるのはワーターワースに限らず，神奈川県で保健婦業務を指導していたGHQの看護指導者も非常に厳しく仕事に徹していたとある[40]。ワーターワースの譲歩しない，折り合いをつけない態度は，沖縄の米占領政策の一つである，「公衆衛生の改善」[41] が目的であり，職務に忠実な看護指導者の特徴であったことは琉球政府の看護関係者にも理解されていた[42]。

沖縄中央病院附属看護学校４期生の知念が「ワーターワース女史は看護職が重要かつ誇り高い職能であることを無言のうちに示し，私達を啓発すると共に，社会的地位の向上を図られた[43]。」と表現しているように，新聞報道に見るワーターワースのUSCAR職員として，また当時沖縄の米看護婦クラブ会長としての活動は，当時の沖縄の看護婦や看護教育者のあり方を体現しようとしていたのではないかと思われる。

Ⅴ．おわりに

本稿はUSCARの看護行政の結果の一つとしての琉大保健学部設置を検証したいと考え，保健学部設置に至るまでのUSCAR関係者の役割，USCAR看護行政政策決定者以外の関与を確認する作業の過程で得た資料を使用し，2015年日本看護歴史学会で発表したものである。

発表の際には占領下の新聞記事を資料とする点について，資料批判の視点から様々な意見をいただいた。そのため本稿では発表した内容に加筆修正している。

復帰から40年以上経過し，ワーターワースの名前を知らない看護者も多いと聞く。占領下という特殊な状況下，異なる文化で育ち，異なる言語を使って沖縄の看護教育に関わったUSCAR看護顧問について考えるきっかけになればと考えている。

なお，2001年に改正された「保健師助産師看護師法」により看護婦は看護師，助産婦は助産師と名称が変更されているが，本稿では当時の名称のままの用語を使用した。

文献

1．川島みどり，草刈淳子，氏家幸子，高橋みや子監修，日本の看護120年，日本看護協会出版会，180，2008.
2．沖縄県立看護学校記念誌，沖縄県立コザ看護学４周年記念事業期成会記念誌編集委員会編，1976.
3．沖縄の看護行政70年のあしあと－1945年（昭和20年）～2015年（平成27年）－，沖縄の看護行政編集委員会，彩優印刷，2017.
4．ライダー島崎玲子，大石杉乃：編著，戦後日本看護改革，日本看護協会出版会，101，2003.
5．沖縄タイムス，アゴの治療にハワイへ　金武の仲間徳吉少年　民政府公衆衛生部の斡旋で，1958年３月２日.
6．沖縄タイムス，軽快退院にまだ問題　愛楽園創立20周年を祝う，1958年11月８日.
7．沖縄タイムス，金武保養院今日十周年　つぎつぎ恒久的施設とり扱った患者千四百人　表彰された功労者，1959年２月13日.
8．沖縄タイムス，八重山病院落成式　きのう盛大に祝賀会，1960年５月１日.
9．沖縄タイムス，白衣の天使のたい帽式，1959年10月９日.
10．沖縄タイムス，戴帽と点燭式　那覇看護学校，1959年10月12日.
11．沖縄タイムス，渡名喜の結核調査　伊豆見社会局長らひるヘリコプターで発つ，1959年４月27日.
12．沖縄タイムス，在宅患者の管理上々　社会局長渡名喜視察終わる，1959年４月28日.
13．沖縄タイムス，人物地帯　米国民政府公衆衛生部看護顧問　ワニタ　ワタワース，1958年５月５日.

14. 沖縄タイムス，ワ女子転勤20日に送別会，1960年５月17日.
15. 沖縄タイムス，功労者に感謝状　助産婦協20周年記念式典，1970年４月26日.
16. 沖縄タイムス，ケイザー女子らの追悼式，1971年２月９日.
17. 沖縄タイムス，私の戦後史〈725〉金城妙子　北部保健所婦長に，1982年11月29日.
18. 沖縄タイムス，私の戦後史〈726〉金城妙子　公看教師に推せん，1982年11月30日.
19. 櫻澤誠　沖縄現代史,米国統治,本土復帰から「オール沖縄」まで，中公新書，2015.
20. 大嶺千枝子，沖縄の看護制度・教育を概説する，看護教育63年の歩み1946～2009，沖縄県立看護学校同窓会編集委員編集，77-82，2011.
21. 大嶺千枝子，占領期に行われた保健婦駐在の制度比較に関する史的考察,沖縄県立看護大学紀要第２号，109，2001.
22. 大嶺千枝子，琉球政府立看護学校の琉球大学委託制度の実態と制度及び終了者果たした役割を探る，沖縄県立看護大学紀要第４号，34，2003.
23. 野村フランク，米国民政府の通訳として日本復帰まで勤務した中から－ケイザー，ワーターワース両女史の思い出－，沖縄の看護行政70年のあしあと－1945年（昭和20年）～2015年（平成27年）－，沖縄の看護行政編集委員会，15，2017.
24. 蘇我スヤ子，爪をかける，沖縄県立看護学校記念誌沖縄県立コザ看護学校45周年記念事業期成会記念誌編集委員会編，64-69，1976.
25. 大嶺千枝子，琉球政府立看護学校の琉球大学委託制度の実態と制度及び終了者果たした役割を探る，沖縄県立看護大学紀要第４号，33-34，2003.
26. 嘉手苅英子，金城忍，高橋幸子，沖縄県における看護師養成学校養成所の推移－第二次世界大戦終了後～2009年まで－，沖縄県立看護大学紀要第13号，116，2012.
27. 嘉手苅英子，金城忍，高橋幸子，沖縄県における看護師養成学校養成所の推移-第二次世界大戦終了後～2009年まで－，沖縄県立看護大学紀要第13号，117，2012.
28. ミシガン州立大学琉球プロジェクト文書 U.A.2.9.5.16 box.274 folder 59 Michigan State University Archives and Historical Collections.
29. ミシガン州立大学琉球プロジェクト文書U.A.2.9.5.16 box.274 folder 59　Michigan State University Archives and Historical Collections
30. USCAR文書　U80800893B　沖縄県公文書館
31. 沖縄タイムス，看護学校の琉大移管　関係者が検討すすめる，1966年２月23日.
32. C.F. サムス著／竹前栄治編訳，GHQサムス准将の改革　戦後日本の医療福祉政策の原点，桐書房，51-55，2007.
33. 竹前栄治，GHQ，岩波新書，193-194，1883.
34. 櫻澤誠　沖縄現代史,米国統治,本土復帰から「オール沖縄」まで，中公新書，84-87，2015.
35. 真玉橋ノブ,コザ看護学校とともに26年“戦争で失った生きがい”を取り戻す,沖縄県立看護学校記念誌,沖縄県立コザ看護学４周年記念事業期成会記念誌編集委員会編，70-71，1976.
36. 沖縄タイムス，伊良波スエ，看護学校の統合は必要看護教育の将来のためにも，1988年８月30日.
37. 沖縄タイムス，人物地帯　米国民政府公衆衛生部看護顧問　ワニタ　ワタワース，1958年５月５日.
38. 沖縄タイムス，金城妙子，私の戦後史〈726〉，公看教師に推せん，1982年11月30日.
39. 沖縄タイムス，池宮喜春，社会福祉の道標　公衆衛生44年の現場から〈16〉，1995年６月８日.
40. 沖縄タイムス，池宮喜春，社会福祉の道標　公衆衛生44年の現場から〈26〉，1995年８月17日.
41. 小野桂，占領期における神奈川県立看護指導所の開設事情，日本看護歴史学会誌 第29号65，2016.
42. 天川晃，占領下の日本　国際環境と国内体制，現代史料出版，78，2014.
43. 金城妙子，原点をみつめて，197-201．平成13年.
44. 知念邦，４期生の記録　コスモス会，沖縄県立看護学校記念誌　沖縄県立コザ看護学校45周年記念事業期成会記念誌編集委員会編，118-121，1976.